



姫路医療センター整形外科 医師紹介

医師紹介
Doctor
整形外科 医師
ふかえ しゅんや
地域医療を支える医師 **深江 舜也**

整形外科の オールラウンダーとして 地域医療を支えたい

整形外科としてのやり甲斐

整形外科医としてのやり甲斐は、治療の結果が目に見えてわかることだと思います。痛みが取れる、動かせるようになる、歩けるなど、患者さんご自身にも運動機能の回復を実感でき喜んでいただけることが、そのまま医師としての喜びにつながっています。もちろん、その分、非常に大きな責務を担っていることを日々実感しています。治療やリハビリの結果が患者さんのその後の生活や人生の質を左右するのだということを肝に銘じながら努めています。

今後、高齢化に伴い整形外科の重要性はますます高まることでしょう。整形外科は首から下の運動器がほぼすべて診療対象ですので、私自身はオールラウンドに診ることのできる医師として、患者さんの社会復帰を支え続けたいと思っています。



筋肉や腱の間をくぐって行われる手術は、メリットがある反面
高い技術と経験が必要とされる。

回復の早さや審美面でも利点の多い股関節手術における前方アプローチ

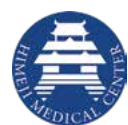


大腿骨頸部骨折による 人工関節置換術に高い実績

当科は、変形性股関節症・膝関節症、大腿骨頸部骨折による人工関節置換術に高い実績があります。このうち大腿骨頸部骨折は特に高齢者に多く、歩けなくなることでとたんに全身の状態が悪くなるというケースが考えられ、それは生命予後と直結することから早急な診断と手術が必要です。

人工股関節置換術および人工骨頭挿入術では、筋肉を全く切らずに展開しインプラントを挿入する前方アプローチ法を採用しています。筋肉を切らないので手術後の痛みが軽減され回復が早いというのは、私自身、別の病院で経験した手術と比較しても、強く実感しているところです。また創については、皮膚のしわに沿った切開を意識していることが当院の特徴です。普通は縦に切開することが多いのですが、横に切ること創部がきれいに治り、下着などで隠れやすいという利点もあります。特に女性の場合は、創を見て安堵されることも多く、少し手術は難しくなりますが、できる限りこの方法を採用していきたいと思っています。

私たちはこれからも患者さんの体と心に寄り添い、1人1人のベストといえる治療を提供してまいります。



独立行政法人 国立病院機構 姫路医療センター
National Hospital Organization HIMEJI Medical Center
〒670-8520 兵庫県姫路市本町68番地 Tel:079-225-3211
<https://himeji.hosp.go.jp/>



WEBサイト

姫望 Vol.4 表紙説明
整形外科メンバー
正面玄関にて



広報誌「姫望」
名称説明

「姫望」という名称は職員から案を公募し、投票の上決定しました。案を出していただいた職員の理由は以下の通りです。
「姫路医療センターから、地域医療機関に向けて当院の魅力が伝わり、患者さんを姫路医療センターに是非紹介したい。」
と思ってもらえるような広報誌をお届けする事が出来るように…。と願い(望み)を込めました。」

姫路医療センター 広報誌

KIBOU **姫望**
HIMEJI Medical Center

Vol. **4**
June
2025

特集 整形外科

INTERVIEW

整形外科 医長
リハビリテーション科 医長

小豆澤 勝幸

整形外科 医師

深江 舜也

痛みなく
新たな道を
歩く喜びを
共有したい



独立行政法人国立病院機構
姫路医療センター

独立行政法人 国立病院機構 姫路医療センター

National Hospital Organization HIMEJI Medical Center

特集

整形外科

多職種連携で目指す患者さんの機能回復と社会復帰

院内連携・病診・病病連携をスムーズに対応

救急医療における整形外科に求められるのは、手術などの早急かつ適切な治療であることはいまでもありません。そしてその目的は、患者さんの身体機能の回復とできる限り健康寿命が損なわれず日常生活へ復帰していただくということです。私たちは妥協することなく、そのことを追求し続けています。そこで問われるのが院内連携、病診・病病連携がいかにスムーズに行われているかということでしょう。当院は連携の重要性を極めて高く評価しており、治療、リハビリテーション、施設入所や在宅支援などで多職種が緊密な関係を築き、1人の患者さんにチームで対応する体制が整っています。退院後のリハビリについては、紹介元のご施設で継続いただくことも積極的に提案しています。日常生活を送りつつ、さらなる機能回復を目指していただくことも当科の特徴のひとつです。

地域のかかりつけの先生方との包括的な連携

私は整形外科医長とリハビリテーション科医長を兼ねており、患者さんの治療や現状についての情報共有、意見交換、意思疎通などの徹底が実現しています。また、週に1度、整形外科が関わっている院内全ての患者さんについてカンファレンスを実施しています。個別の事案では看護師、理学療法士、地域医療連携室などによる会議で、連携の現状や患者さんの今後の治療方針を確認しています。在宅支援が必要な場合は、病棟の看護師が主導しケアマネージャーなど病院外の関係者も含めたカンファレンスを行っています。

ここで改めて申し上げたいのは、地域のかかりつけの先生方に私たちの診療を支えていただいているということです。持病など日常の疾患や困りごと、手術後のケアなど、頼れるかかりつけの先生がいてくださってこそ、患者さんも安心して手術等の治療に臨めるのだと思っています。これからもそうした先生方と手を携えて、途切れのない連携を行い、患者さんの再起と回復を目指していければ幸いです。

1人1人の患者さんにチームで対応する



整形外科 医長
リハビリテーション科 医長

あずきざわ まさゆき

小豆澤 勝幸

関節外科	股関節	人工関節	26
		人工関節再置換	6
		人工骨頭	37
		その他	1
	膝関節	人工関節	42
		人工関節再置換	2
		単顆置換	2
		半月板	17
		その他	12
外傷外科	骨接合術	上 肢	79
		下 肢	123
	その他		34
その他			47
手術総数			428

2024年度 整形外科における手術件数

人工股関節手術では創の小さな前方アプローチを実施

創が小さく出血量も少ない 前方アプローチ

整形外科の診療範囲は幅広いですが、近年の高齢化の関係で、当科でも骨折や変形性関節症などが多く見られます。このうち変形性股関節症では、創が小さく出血量も少ない前方アプローチによる低侵襲手術を得意としています。また、大腿骨頸部骨折で骨癒合が難しい場合は人工骨頭置換術のみならず人工股関節置換術を積極的に選択しており、この場合も前方アプローチを採用しています。

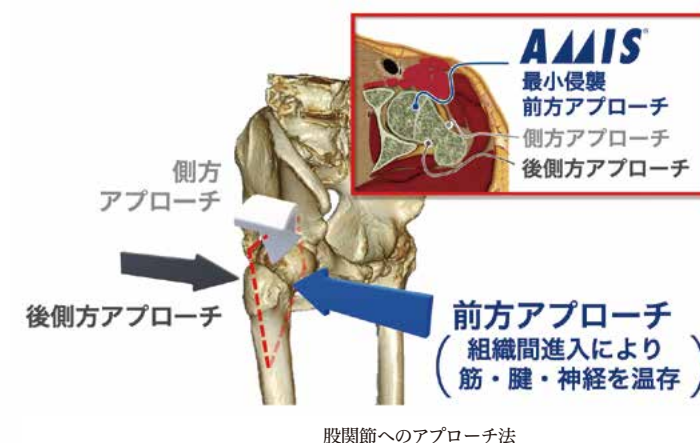


前方アプローチ手術で使用するデバイス
(レッグポジショナーという牽引台)

低侵襲手術を通した 整形外科専門医の育成

少し解説しますと、人工骨頭置換術は大腿骨の頭部分（骨頭）を人工物に替える手術のことで、大腿骨側も骨盤側も人工物に替えるのが人工股関節置換術です。若年の大腿骨頸部骨折の患者さんには、従来は主に人工骨頭置換術が行われてきました。しかし、骨頭のみ置換した場合は将来的に骨盤側の軟骨がすり減ってしまうリスクがあります。一方で、人工股関節術はその懸念がなく、耐用年数も10年後95%、30年後でも75%と極めて良好で、これからも進化が期待されるでしょう。当科ではこの2つの選択肢を用意して、ご年齢、持病の有無、活動や生活状況などを総合的に判断し、個々の患者さんにとってよりよい手術を実践しています。

股関節手術における前方アプローチは患者さんにとってメリットが大きく、当科としてはこれからも積極的に行ってまいります。研修医・専攻医の先生への教育にも力を入れており、後進に前方アプローチの技術を高めてもらう上でも、当科としての役割を果たしていきたいと思っています。



股関節へのアプローチ法

パーソナルな人工膝関節置換術を実践

社会の高齢化に伴って変形性膝関節症の患者さんも増え、人工膝関節置換術は一般的な手術となっています。一方で、人工膝関節インプラントをどのように設置するかについては議論が続いています。具体的には、すべての患者さんに対してひとつの設計図で置換するのか、あるいはパーソナルな置換をするのか、という議論です。当科では、できる限り患者さんの本来の脚の形に合わせて設置する、いわゆる人工膝関節インプラントのパーソナルな設置を実践してきました。両者については、術後10年以上経過すると患者さんの筋力が変化するためその差はなくなる、という意見もあります。しかし、パーソナルな設置は術後の違和感が少なく、手術からの回復も早いという意見もあります。私たちとしては良好な術後回復を目標として、本来の脚の形に合わせたパーソナルな人工膝関節置換術に取り組んでいます。



上肢に比べ、下肢の関節は、体重を支えることになる。早く回復し歩き、運動量を確保することが、すなわちQOL向上に繋がる。

個々の脚の形に合わせるパーソナルな人工膝関節手術